

神経症的悪循環の二つの特徴：心理経済学的見解

佐賀医科大学一般教育 妙木 浩之

Two characteristics of neurotic vicious circle: a psycho-economical view

Hiroyuki MYOUKI

The psychoanalytic concept of “neurotic vicious circle” (Strachey) is reconsidered from a psycho-economical point of view. The case presented here is a forty-year-old male patient who has been suffering from obsessive neurosis and depression. Reviewing the psycho-therapeutic process of this case material in detail, one finds that a psycho-economical interpretation of neurotic vicious circle is indispensable in understanding the neurotic state of the patient better. The same probably applies to a given patient in a similar neurotic state

1 はじめに

今まで精神分析の領域で神経症的悪循環 (Strachey, 1934) として指摘されてきたものは、精神構造の超自我と自我、そしてイドの間で、あるいは治療関係の中で取り入れと投影の間で生じるものと考えられてきた。これらはいずれも精神内界、内的幻想だけを取り扱った議論である。本論は、そうした内的幻想だけを取り扱う議論とは異なる、心理経済学 (妙木, 1997) という視点の導入を行って、その視点の方がより妥当な事例を通して考察し、その視点から見た神経症的悪循環の二つの特徴を抽出したいと思う。

2 ある喪失

症例 A 氏 40歳男性, 強迫神経症。鬱状態。

A 氏は以前から真面目な性格であった。彼はサラリーマンの家族に長男として生まれた。父親はおとなしい性格で、母親がよくしゃべり、ほとんどの場合に母親の方に発言権、優先権があったという。彼の下に、2才下の弟と4才下の妹がいる。父方祖母と同居していたが、嫁姑の仲は悪く、そのため母親はパートで外に働きに行き、おばあちゃん子として彼は育っている。祖母は彼が就職する頃に亡くなっている。地方の工業高校を卒業後に東京に出て、高校の先輩の紹介で従業員が20人ほどの電気関係の小さな会社に勤めてきた。主に経理の仕事を任されていて、高校で

はむしろ技術系を専攻していたのであまり得意な分野ではなかったが彼が熱心に仕事をするので、主任として働いていた。真面目で上司の人の受けも良く、仕事をしながら経理士の資格をとったという経緯もある。見合い結婚で10年ほど前に結婚、すぐに子どもができて一年半後に男の子が産まれる。さらに四年後に女の子が生まれたと言う。だからもともとは今の家族は四人であるが後述の事情によって、私が出会った頃には三人家族になっていた。彼が勤めはじめた頃は好況期だったので仕事の発注は多く、夜遅くまで仕事をしていた。先述のように職場では非常に信任が厚かった。ただ本論の主題である家族については「夫婦関係は良いとか悪いとか考えたことはない」という。ただ仕事が忙しかったので出産に立ち会ったり、子どもの世話をしたり、あるいは家族とともにする機会もなかった。仕事の仲間といることが多く、家庭を顧みることがなかった。

彼が鬱状態に陥った頃にはいくつかの出来事が重なっている。まず自分の父親が胃がんで亡くなっている。かなりどたばたした状況があって、忙しくしていたが、さらに悲劇的なことが起きる。息子が交通事故で亡くなってしまうのである。理由は、トラックの運転手の飲酒運転で、明らかに一方的な事故、過失であった。息子が亡くなった時に彼は淡々として、むしろ「妻のほうを取り乱していた」という。さらに悪いことに、息子さんの喪失を契機として、家庭の不調和が顕在化したことであった。伴侶である妻は対象喪失を埋め合わせようとしたのであろうが、彼が「あまり家庭を顧みなかったこと、今まであまりにも父親らしい、夫らしいことをしてこなかった」ことを非難し始めた。彼のほうもこうした非難は思っても見ないことで、すっかり動揺してしまったので、あまり上手い対応ができなかった。しばしば喧嘩が亀裂を生み、話は妻の実家の母親を巻き込んで、実家に妻が帰るということがしばしば起きた。そして離婚争議にまで発展してしまう。

息子の葬儀の後に起きたこれらの家庭争議のなかで、彼はしだいに仕事に手がつかなくなり、鬱状態に陥ることが多くなった。そうした状態に落ち込むと「自分が仕事の失敗をしたのではないか」ということがどうしても頭から離れなくなった。最初のごくささいな計算や書類の整理、あるいは書面に印鑑を押したかどうか、そういったことだったというが、強迫観念や強迫行動がひどくなった。そんな時に、彼の妻がある精神科医に相談した。精神科医は妻と彼の双方を呼び、治療に当たることになったが、あまり話が進まずに、離婚争議を治療に持ち込むことが多かったという。その間、著者が勤めていた研究所の一人が書いた「強迫神経症」記事に彼の妻が触れて、主治医に相談して、主治医は著者に紹介してきた。紹介状には「強迫症状、鬱状態」とあった。

3 別れる理由

治療の開始が妻によって主導されたという点は、この治療を考える上でまず留意すべき点である。興味深いことに相談を勧めたのは彼の妻であったが、妻は最初に精神科医に相談して、それ以後、私たちの治療に訪れていない。初回にA氏と妻の間に行われたやりとりはほぼ離婚争議と同じ内容である。同じ事は最初の精神科医にも言える。妻が主導で治療に来所したが、そこでは主に妻が夫の不満を言う場面が多かったらしい。紹介状には妻は「主人がおかしいのではないか、治療が必要ならばどんなものも受けさせて欲しいと」訴え、しばしば「本人が治るかどうか心配」と述べていたという。つまり精神科の治療とほぼ同時に離婚争議が始まっているのである。本人が治るかどうかという心配が、実は本人を自分が面倒見切れない、あるいは公の機関に任せることで本人が病気であることを確認して離婚するのは当然だという自己正当化のために、受診行動が使われていると推察される。

力動的に見ても、この種の出会いは問題が多い。実際、離婚争議のなかで私との治療は続けられたが、主治医との治療は中断している。A氏によれば、あまり抗精神薬が効かなかったというのが理由であったが、離婚争議に精神医学が使われたために、治療に対する不信感が募り、中断したという面も無視できない。私のほうはその主治医の紹介で来たときに、最初に自分から来所するかどうかということを本当に必要だと思うなら始めようと伝えてあったので、その点が生命線になったと考えられる。

離婚問題に関して、こうした夫が家庭に不在で、家族を省みないので、積もり積もった不満や不機嫌を理由に離婚するという報告例は『妻たちの思秋期』が書いているように、実際に増えている。溜まり溜まったものが噴出したという心理的な説明が主に行われてきたが、実際にそうであろうか。仲が悪いなりに不満がある配偶者と生涯をともに過ごす伴侶の例は実際には非常に多いはずである。だから著者が根拠としている心理経済学の視点から見れば、これらの離婚の理由は多分に社会経済的なものだと考えられる。本事例もそうだが、妻が離婚を訴えるにいたった経緯は一見「精神科医に受診しているため」、そして「そこで病気が改善したいため」という理由で離婚にいたった経緯が感情的、衝動的であるかのように語られている。でも話をもう一度整理してみると、精神科への受診を含めて、さらには著者の勤める研究所への紹介を含めて、それなりに社会経済的な背景を勘定してのことである。つまり離婚をして得られる利益、あるいは結婚していることに比べて離婚していることが損ではない場合に選択が行われている可能性が高い。

この事例の場合、本人の話を聞いていくとそのことが分かる。そもそも妻が離婚を考え始めたのは出産をはじめとして、家事の多くを実家の母親に依存し始めた頃

ではないかとA氏は言う。実際に、その頃から性的な交渉が全くなくなっている。妻の実家の母親は、経済的に豊かで、これまでも影に日向に妻を通して、A氏の家庭に起きる経済的な危機をサポートしてきた。その母親が同居を申し出てきたのは、その頃だったと言う。本人は問答無用と断ったが、この時点で妻が非常に不愉快な反応をして何日も話をせずに、その後、実家に入り浸ることが増えたという。

また息子が亡くなったことは悲劇的なことだが、その後さらに「前にもまして妻が頻繁に実家に入り浸る」ようになったという。つまり第一子がいなくなった悲しみを家族で慰めたり語ったりするよりも、そうした悲劇がさらに家族の距離を広げたということであり、妻の側の家族力動から見れば、それによって夫婦間が親として機能する負担が減ったと言う面は無視できない。妻も「息子がいたら離婚の話は出さなかった」と語っていると言う。妻の側からすれば、離婚しても良い、損にはならないし、利益が大きいという要素は増えていたのである。

彼との面接は主に妻に対する不満から始まった。当然と言えば当然で、彼は働いてお金を家にきちんと入れていたつもりだったし、家族と言うのはそういうものだと思っていたのに、離婚の申し出は寝耳に水というわけであった。自分が病気なのに、それに追い討ちをかけてきたと言うのも彼の印象であった。

私たちはしばらく家族像についての話をしていたが、その時に彼が気がついたのは、結婚した理由も含めて、妻のことは何も知らないということであった。そもそも結婚してから、性交渉以外は何ら接触がなく、それもかなり一方的なことで、今までに会話らしい会話もなかったという。A氏は面接をしながらしみじみと「こういう会話をしたことがなかった」と言う。「会社の人と話しをしたことはあっても、家族と話をすることはなかったのです」と。彼の中には家族についての「蓄積(ストック)」がなかったのである。心理療法は、話をやりとりすることで、心の風通しの流れをスムーズにするという側面と、話をすることで整理をしながら自分の物語をストックしていくという側面がある。話していくことで彼が気がついたのは、家族の物語、ましてや夫婦の物語が全くないということであった。次第にA氏は心理療法のような会話がいったなら、離婚が防げたかもしれないという当然といえば、当然の結論を自ら導き出していった。

確かにストックとフローが、そもそも、彼の家族のなかにはなかったのである。そうしている内に彼は、自分がこの離婚の責任があるという意識を持ち始めた。慰謝料も裁判所が決めた価格ならば構わないし、ましてや養育費は家裁で呈示された値段が少ないのではないかとまで思うようになった。

4 父親の喪失

ある時、彼は自分の強迫症状についての連想の中で、父親の葬式の場面を思い出した。父親の葬儀の時、彼は手続きや葬式のため忙しく立ち振る舞っていた。そこでとてもショックだったのは「父親の死を横目に皆が遺産の分配に関して露骨な争いをしていたこと」だったと言う。そんな肉親の姿に、父親に申し訳ないとは思わないのかと内心A氏は怒っていた。さらに彼の妹はどこかに隠されたヘソクリがあるのではないかと探し回りはじめたので、いい加減「堪忍袋が切れて、いいかげんにしろ不謹慎だ」と叫ぶ。すると妹はその言葉にむしろ逆上して、彼が東京に行ってからお父さんの面倒を見てきたのは一体誰だったか、最期を看取ったのは一体誰だったかと言いつ返し、そのことに彼は何も言えなかった。

東京に帰る電車の中で、A氏は妻に怒りが収まらないということをこぼして伝えるが、妻は「面倒を見てもらったんだから」と言い、そっけなかったという。彼の中には、やりきれない思いが強く残った。父親について考える機会はまったくなく、むしろ、その場に居たたまれなくなり葬式のこと、遺産のことを取り急ぎ済ませて、足早に帰京した自分のことばかり考えるようになったという。この頃、胃が痛くて血便が出たという理由で近くの病院にかかったというので、彼に何らかの変調が起こり始めたのが、この頃だろう。

さらに次にA氏が連想したのは、息子の事故である。彼は職場で連絡を受けたが、ここからの連想はほとんど混乱に近いもので、一時的に精神病様の状態を経験したと推測できる。確かにその後に仕事も十分に手につかず、しばしば何もしていなかったり約束していたことを忘れていたりしていた。家庭ではしばらく茫然自失の状態であったが、この頃から彼はほとんど自分の家族やその喪失について話していない。というよりも彼には話す相手がいなかったのである。妻は彼とあまり話をしなかったし、会社でも今まで仕事の合間に会話が成立していたが、彼が仕事に集中できなくなると、仕事仲間も心配しながらも距離を置くようになった、と彼は感じている。そんな孤独の中で彼が悲しみを「清算できなかった」のは確かである。父親の死、そして息子の死が大きな喪失であったにもかかわらず、喪の仕事に共有する人はいなかったのである。

5 心のストックとフロー

彼の強迫症状のことを考えるなら、彼が仕事で「失敗したのではないか」という内容で強迫が起きたことは、興味深い。そもそもA氏において、精神的なバランスが取れていたのは、主に会社でのやり取りであったと考えられる。家庭やそれ以外の場面はほとんど交流がなかったといってい。だが対象喪失に伴う家族の亀裂に

直面化して、彼は仕事に手がつかなくなってしまった。「仕事が生きがい」と考えていたA氏にとって、これはかなりの痛手であった。「生きがい」というあいまいな概念ではなく、心のストックとフローという視点から見れば分かりやすいのである。おそらく彼にとって話をする唯一の場面は仕事場であり、そこで起きていた交流によって彼のストックとフローが上手く循環していた。ところが仕事ができなくなり、そのことを気にするようになって、彼の心の経済はかなり悪い袋小路に入り込むことになったのである。彼が仕事が上手く手につかなくなった、その当時、彼は自分の言葉が周りから「軽んじられるようになった」と感じている。

私たちは話さないことで、彼の内と外で循環していなかった感情について話していった。彼の自由連想の特徴は、淡々としていて、強迫神経症者がそうであるように同じ話題にしばしばこだわるというものであった。主題は結婚、死に限られていた。それらは忘却されていたものではなかったが、面接場面はもちろんのこと、実生活の中でも感情を伴って語られたことは一度もないものであった。当初彼が思い出の中で話していたのは、主に孤独や悲しみであったが、話は実に淡々としていた。

ところがある時「正直言って、お葬式や手続きが忙しくて、息子の死を悲しんだこともない」と言って、葬式に触れる場面に大きな声で泣いたことがあった。治療者の方が、普段の彼とあまりに違うので、驚いた。この時にはじめて治療者のなかに、おそらく強迫神経症は彼の解離された感情が「自分はだめだ」という抑鬱感覚によって補強され、神経症的な悪循環を起こしていたということに気が付いた。ただ泣いた後、A氏はすぐに取り乱したことを後悔して、淡々と連想を続けた。「どうもすみません」と言う彼の言葉に、治療者は「すいませんとすることで、私にも出せない気持ちが今までにも、そしてここでもあるんですね」と解釈した。

解釈の結果、A氏は子どもの頃のことを思い出す。子どもの頃母親と姑が仲が悪く、よく父親と母親がけんかしていたこと、そしてそのため母親がパートに出て、自分が主に祖母によって育てられたこと、さらには父親と母親が仲が悪いのは自分のせいだと思っていたことを思い出した。「いけない」と思いやすい理由はこころへんにあるらしい、とのことであった。その後解釈の際に、この話題はしばしば取り上げられ、自分の性格が「物事を自分のせいだと思いやすく、自分はだめだと思った時点で感情を押さえてしまう」というだめな自分についてしばしば意識化されていった。

また仕事場と同じようなエピソードは小学校と中学校にあった。小学校では少年野球をやっていてレギュラーであった。周りの仲間とも楽しく話しができたが、一度骨折したのをきっかけにして、野球に出なくなり、するとその仲間たちとも疎

遠になってあまり話ができなくなり、小学校時代はあまり周囲と話さない子どもになったのだという。中学校時代には勉強に関して同じようなエピソードがある。A氏によれば「上手く行かなくなると話し相手がいなくなる」という。

6 損害賠償のダイナミックス

自由連想の中で治療者に印象に残ったのは、息子の葬式とその手続きとが、父親の葬式と同じように、悲しみを剥奪する体験になっているという印象であった。息子の事故の相手は酒帯運転をしていたための過失による交通事故であったので、その後すぐに損害賠償の話になった。そこで妻は相手に謝罪を求めることを強く主張、さらには保険会社の人が仲介に来たときには妻は取り乱してしまって、すべての対応を彼がしなければならなくなった。興味深いことだが、主にこうした手続きに対処した彼は、淡々と対応しながらも、「ああこれで息子が亡くなったんだ。こうやって清算していくことなんだ」と思ったという。明らかにそこで表現されるべき感情、悲しみ、遺恨がここでは失われている。「息子を奪われた恨みが長く心に残った」のはこうした手続きに何ら関与せずに、彼にまかせっぱなしだった妻の言葉であり、A氏はたとえば、あまりに事務的だったという。その後、妻はしばしば息子の死にあたった彼についてそう語っている。A氏によれば「妻はそれがどれほど事務的だったのかは知らないのです」と言う。彼の方はもろもろの対応に追われ、しかもそれを理解して、金銭的に換算しなければならなかったもので、そうした印象すら残っていない。

ある時、面接中に損害賠償というのが正しいのかどうかという話になった。やや複雑なので簡単に説明するとこうなる。損害賠償の額は積極的損害と消極的損害、そして精神的損害とが分けられる。被害者が交通事故などで死亡した場合、積極的損害は葬儀費にあたる。消極的損害というのは分かりにくい、逸失利益と呼ばれ、将来もし被害者が生きていれば得られていたであろう利益である。今回のような未成年の場合、いわゆる賃金センサスに基づいて、18歳の初任給平均額に一定の係数(新ホフマン式)をかける、あるいは全年齢の平均給与額にライプニッツ式係数をかけて出す。こうした事情を彼は良く分からなかったし、著者自身も後に調べて分かったことであるが、当時の彼は漠然とではあるが、その算定方法にそれなりに納得したそうである。

だが、彼が納得できなかったのは慰謝料である。そもそも慰謝料を死者に払うということは法律でも議論になっているが、彼は保険会社を介した相手の対応ごく慣例化したものであるという印象を受けた。第三者が介入したほうが問題が起きないという配慮が働いているのは分かるが、その対応はあまりにも定式化されすぎて

いるという印象をA氏は受けたのである。一般的に慰謝料は一家の支柱であったかどうかを基本にして算出されるが、その一方的な決定はあまりに「話にならない」という印象を彼は持っただろう。けれどもこれまでの文脈でお分かりのように、彼は周囲の人々と心理療法で行われたような話をそもそもしていなかったものであり、話になる人がいなかったのである。

面接をしていく中で、彼はしばしば失ったものが何であるのか分からないと言いながら、息子が幸せだったかどうかと問い直していた。「生きていても私はあまり彼と関わらなかった」とか「今のように家族がバラバラになってしまった姿を見るより良かったかもしれないですね」と死が必ずしも喪失を意味しないのではないかなど、死の意味について考えるようになっていった。精神分析の指摘を待つまでもなく、喪失には失うことに伴うもろもろの感情があり、なかでも恨みや怒りが中心を占めている。だから彼が死に関して失われていたものが、こうして悲しみとして体験されていったことは臨床的に見て意味が深い。喪失は体験されて、彼の鬱はかなり改善された。彼が言うには「もしお金のことが、こうして話し合われている中で決まっていくなら、こんなことにはならなかった」。これは損害賠償を考える上でも、非常に重要な指摘だと考えられる。つまり一方的に基準として決められている慰謝料や必要経費は、悲しみを清算することにはならないが、語り合われる中でお金のことが取り扱われるならば、それほど苦痛ではなく、むしろ重要な恩恵、感謝と償いの機会となるということである。

強迫症状は、その後、「少し気になる」という程度ではあるが存続し、しばしば彼を苦しめたが、抑鬱状態で塞ぐことが少なくなった分、仕事場で上手くやって行けるようになって、仕事が忙しくなるとそれどころではなくなって、治療は終結した。

7 考察と結論

おそらく精神分析的に本事例の神経症的な病理を理解するには、子供時代の心理力動、そして二つの対象喪失にまつわる家族力動の変化によって起きたことがほぼパラレルであるという点が注目に値する。もちろんそこには、

- (1) 彼の性格構造が同じような状況を作り上げる
- (2) 人間関係の反復強迫傾向
- (3) 偶然の産物

などの仮説が考えられる。(1)と(2)の仮説は主に精神分析的な仮説が準拠するもので、本人の内的な精神構造が同じような社会状況を作り上げるという仮説である。(3)は外傷説がそうであるように、まったく外的な出来事や外的ストレスが病気の原因であると考えている。著者の意見では、そのどれもが心の状態、あるいは

社会経済的な状況のどちらかを取り扱っている限り片手落ちであると思われる。確かに神経症症状は「袋小路」があって、J.ストレイチーの言い方を借りるなら、「神経症的悪循環」が起きて成り立っていると考えられる。だがA氏において、おそらく父親の葬儀の時や交通事故の処理の時にその悲しみを解消できるような親類や家族がいれば、こうした反復は起きなかった。ここで考えるべきことは、こうした話し相手がいなかったことはすべてが性格や反復強迫傾向にではなく、本人が生きていかざるを得なかった社会経済状況があるということなのである。A氏が家庭に時間を割くことをもう少ししていれば事情はまったく異なっていたに違いない。もちろんこれは本人の選択なのかもしれない。忙しくてもそういう印象を家庭に残さない夫婦関係があるには違いない。そこには本人の遺伝的、生得的要素が強く影響していたり、精神分析が指摘する反復強迫が働いているように見える。だがそれらの傾向が強力であったために抑鬱傾向は強く、鬱状態には陥っていたとしても、「失敗」にまつわる強迫症状と鬱状態との悪循環が、そうした傾向だけから起きていたとは考えにくい。

ここで先に「別れる理由」で述べた心理経済学的な説明を思い出していただければ、症状の発生の背景には、社会経済的な結びつきの変化があったことが分かる。つまり鬱における悲しみと怒りの感情の剥奪が起きた背景には、家庭内での経済的な枠組みの変化があったと考えられる。それゆえ「失敗」があったとすれば、A氏がその点を意識できずに、妻の離婚を不意打ちと感じた点であった。経済的な基盤という点から見れば、すでに彼は自分の悲しみを吸収してくれる居場所を失っていたのである。そこでの喪失は意識されなかった。というのも、彼は父親(主人)は会社、母親(妻)と子どもは家庭という二分法が当然であり、そこには「愛」があるからだと思い込んでいたからである。そのため心理経済学という視点を導入することで、神経症的悪循環の新しい考え方が可能である。つまり神経症的な悪循環の特徴の一つは

A) 神経症的悪循環の前提として、社会経済的な枠組みが関係（やりとり）を維持できない

という点がある。その場合に「家庭はこうあるべき」「愛」のイデオロギーや思い込みはほとんど役に立たないのである。

逆に治癒のメカニズムから見ると、損害賠償における第三者とカウンセリングにおける第三者のあり方は対比的であることが分かる。A氏は損害賠償について精神的なものの計算が十分に行われていないと語っているが、おそらく精神療法が計算に入れるべきことは、こうしたやりとりの経済性についてであると暗に示唆しているのである。ちなみに精神療法は基本にお金を介して成り立っている。

だから治療関係の成立（治療契約）と金銭における契約とはほぼ同じことになる。そして関係は、彼が発症した経緯においてはなかったことなのである。つまり経済的基盤を前提としたやりとりが逆に彼の神経症的な悪循環に治療的だったということになる。

このように考えるなら、関係（やりとり）と社会経済的な基盤とは相互に循環的であることが分かる（妙木,1998）。そしてもしそうだとするなら、本事例の神経症的な悪循環、つまり神経症の発病にあたって考えられるもっとも有力な仮説は、クライアントの主観的なものが社会経済的状况とほぼ連動して、心の内側と外側にも悪循環が生じている時なのである。おそらくそこでの悪循環は出口を失っているので、複雑系の言葉を使うなら「完全なる均衡」を起こしていると考えられる。そのため神経症的悪循環とは、心の中にだけでなく、

B) 心と社会経済状況との間にも悪循環（完全なる均衡）が起きているのである。

以上、本論は、「神経症的悪循環」と呼ばれてきたものの心理経済的な特徴を二つ、A)とB)とを抽出し、事例を通じて例示した。

参考文献

妙木 浩之 (1997) 『父親崩壊』 新書館

妙木 浩之 (1998) 『心理経済学のすすめ』 新書館

Strachey, J. (1934) The Nature of the Therapeutic Action of Psycho-Analysis. *International Journal of Psycho-Analysis*, 15:127-159.

本論では事例を通じて、精神分析において「神経症的悪循環」(Strachey)と呼ばれているものを心理経済学という視点から見直した。事例は40歳の男性で、鬱状態と強迫神経症に悩んでいた。心理療法の過程で神経症的悪循環、およびそこからの脱出が観察された。事例素材を詳しく見直してみると、精神分析、あるいは精神内的な意味は不十分であり、むしろ社会経済状況を含めた心理経済的視点が不可欠であることが分かる。